

鹿児島県の水車利用に関する研究

第2報 薩摩半島北部地域について

門 久義・松村 博久

A STUDY ON THE UTILIZATION OF WATER WHEELS AND TURBINES IN KAGOSHIMA PREFECTURE 2ND REPORT, ON THE CASE OF THE NORTHERN PART OF THE SATSUMA PENINSULA

Hisayoshi KADO and Hirohisa MATSUMURA

In this report, the utilization of water wheels and turbines to the present time in the northern part of the Satsuma Peninsula is described in full and considered especially with respect to the historical and human geo-graphical causes in each area.

It is clear from this research that in Kushikino City, there are, at least, two hundred and two locations of water wheels for pounding gold ore, and in the whole district, thirty seven locations for rice-polishing or milling, twenty four for producing bone meal, and so on. The number of total locations is three hundred and fifteen. Three water turbines, one Pelton wheel, four over-shot iron wheels, two over-shot wooden wheels and six horizontal wooden wheels now exist.

1. ま え が き

前報¹⁾に引続き、本報告では薩摩半島北部地域の水車利用実績に関する詳細なデータの記録を目的とする。そして、水車の利用形態や傾向と各地域の歴史・地理的要因との関係について個別に検討し、水車利用の実態をできるだけ詳しく把握し、将来における地域再開発の展望にも参考になるような資料とすることを意図する。

2. 薩摩半島北部地域の水車利用実績

薩摩半島北部の2市9町についての調査結果を、各市町村単位で表および図にまとめて示す。表中の番号は、図中の番号と対応している。図中の●印は水車の設置場所を、図と表の番号はその詳細を表している。

(1) 串木野市(表1, 図1)

現地調査時、1の精米水車しか確認できなかったが、金山の搗鉦水車については、後日郷土史家の竹中武夫氏から資料²⁾の提供を受けた。さらに、搗鉦水車の台数について各種資料^{3), 4)}に基づいて調べたものを2～6に示した。3～6の各製煉所はほぼ同時期に稼行し

ており、芹ヶ野鑛山も明治30(1897)年には搗鉦水車が111(55 HP)台を記録⁴⁾する程度であった。その当時の水車は金山川筋一帯だけでなく、荒川およびその支流の太郎坊川筋にも多数の水車が設置されていたことが、竹中氏による水車跡の調査によって明らかになっている。また、宮之原製煉所の場合には、鉦石を東市来まで運んで水車で搗鉦をしたそうである。

したがって、図1には各鑛山の位置を示しただけであり、搗鉦水車の分布は全く不明である。明治末までには、個人の鑛山は廃止・統合されてしまったので、芹ヶ野金山が明治末に所有している202台の自稼人用搗鉦水車数³⁾は、串木野市におけるほぼ最大台数と考えてもよいであろう。

(2) 鹿児島郡吉田町(表2, 図2)

錦江湾へ注ぐ思川の支流、本名川には、総数6台のうち5台の水車が設置されていた。吉田町は山あいの地にあり、水車の用途も精米、製材、線香製粉、骨粉製造と多岐にわたっている。

(3) 日置郡郡山町(表3, 図3)

鹿児島市を経て錦江湾へ注ぐ甲突川の源流と、東市来町から吹上浜へ流れる神之川の源流を共にもつ郡山

町は、水量が豊富で比較的平地も多く、精米水車8ヶ所、骨粉水車4ヶ所もあった。しかも、鉄製上掛け水車が2台現存（休止および放置）している。

(4) 日置郡東市来町（表4，図4）

大里川と江口川が町の中央部を流れ、南端を神之川が流れる東市来町は、比較的平坦な地形であることも手伝って水車の利用が13ヶ所もあった。そのうち骨粉製造が6ヶ所、精米が4ヶ所もあるのが特徴である。上述のように、串木野市の宮之原製煉所などは、東市来町にまで金鉱石を運搬し、水車で搗鉱を依頼していた。竹中氏によれば、11の鹿児島化成の「下の水車」などが、当初は、搗鉱用に使用されていたらしい。図中○内の数字は東市来町のものを示す。

木製上掛け水車1台が現存（放置）している。

(5) 日置郡市来町（表5，図4）

今回の調査では、市来町には水車設置箇所が2ヶ所しか確認できなかった。しかし、明治時代に串木野の金山が盛んに稼行していた頃には、上述のように、市来町にも搗鉱水車があったのではないかとと思われる。図中□内の数字は市来町の水車を示す。

(6) 日置郡伊集院町（表6，図5）

伊集院町には合計12ヶ所の水車場があり、搾油や骨粉と兼用も含めて精米用水車は10台もある。搾油関連の水車が3台あり、製油事業も盛んであったことがわかる。図中○内の数字は伊集院町の水車を示す。

鉄製縦軸フランシスタービン1台とペルトン水車1台が現存（放置）している。

(7) 日置郡松元町（表7，図5）

松元町は、河川が四方に流れ去るような地形をもつ山深い町である。したがって、水車利用は少なく、4箇所のうち3箇所は町境に位置している。図中□内の数字は松元町の水車を示す。

(8) 日置郡日吉町（表8，図5）

日吉町は河川が少なく、台地を深く浸食して流れているので、海岸付近を除けば平地は少ない。そのため、水車の利用も少ない。図中△内の数字は日吉町の水車を示す。

(9) 日置郡吹上町（表9，図6）

吹上町は、水車が11ヶ所に設置された実績があり、精米用は5ヶ所、搗鉱用2ヶ所、製糸場2ヶ所、製材用1ヶ所、それに水車からくり1ヶ所である。とくに4の水車からくりは木製縦軸在来型で、技術史的にみて非常に古いタイプに属し、興味深い。昭和60年から復活したものであるが、古老の記憶から少なくとも明

治末頃には既に行われていた。なお、図中○内の数字は吹上町の水車を示す。

昭和62（1987）年7月の温泉祭には、水車からくりが6台稼動していた。それ以外にも縦軸と横軸のフランシスタービンが現存（休止と放置）している。

(10) 日置郡金峰町（表10，図6）

金峰町は、万之瀬川の支流長谷川に沿って4ヶ所の水車設置場所があった。精米用水車が少ないのが意外である。図中□内の数字が金峰町の水車である。

(11) 鹿児島市（表11，図7）

鹿児島市は、藩政時代から島津藩が経営していた集成館、瀧之上火薬製造所、稻荷馬場火巧所、田上・永吉水車館（機織）、錫山などが特徴的である。また、明治になってからは、稻荷町の稻荷川沿いに製麺、骨粉、搾油、精米・製粉・精麦、製糸等の水車産業、甲突川上流や永田川の支流滝之下川に多数の骨粉製造水車が設置されている。骨粉水車14（現存1）ヶ所、精米用6ヶ所、火薬製造用6ヶ所など、総数41ヶ所もあった。現在、看板駆動用の水車が1台稼動している。

表1 串木野市における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1	冠岳 川畑	在来型 (?)		木 (?)	精米	不明	不明	
2	下名 芹々野	在来型		木	搗 鉦	明治4年～昭和初期	芹々野金山	水車 202台 (明治末) 「芹々野金山鑛業誌」
3	上名	在来型		木	搗 鉦	明治27～30年	日野鑛山製煉場	水車 8 台 (4 H P) 「鹿県統計書」
4	上名	在来型		木	搗 鉦	明治27～33年	宮之原製煉場	水車33台「鹿県統計書」
5	上名	在来型		木	搗 鉦	明治22～33年	薩摩山鑛山製煉所	水車20台「鹿県統計書」
6	上名	在来型		木	搗 鉦	明治21～33年	西山鑛山製煉所	水車15台「鹿県統計書」

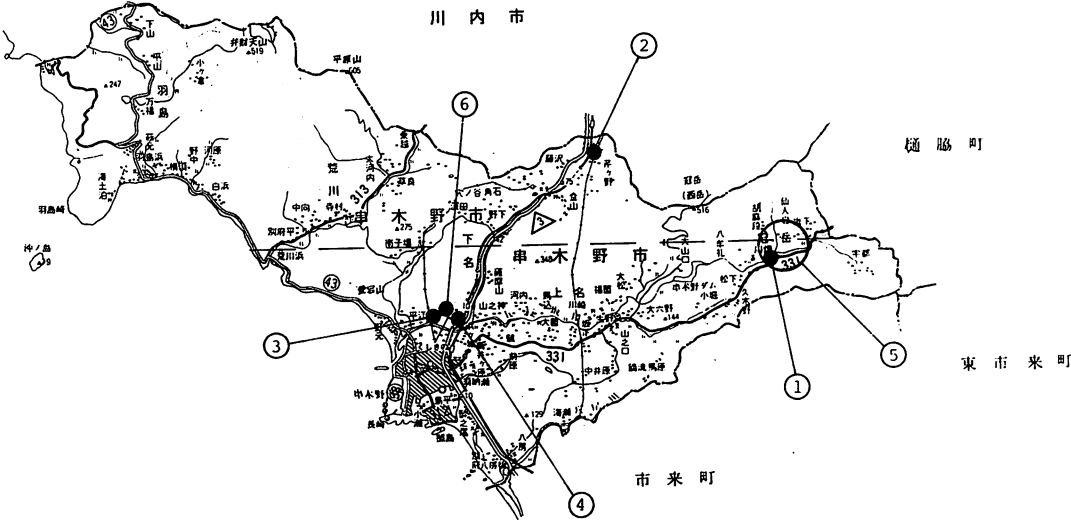


図1 串木野市の水車利用分布

表2 鹿児島郡吉田町における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1	東佐多浦五反田	前掛 け	約 4 m／60cm	木	精 米	～昭和20年頃	梶 原 某	
2	東佐多浦五反田	上掛 け		木	精米・製材	戦前～昭和30年頃	加世田 某	
3	東佐多浦五反田	縦軸タービン		鉄	製 材	終戦後～昭和35年頃	重 富 産 業	ドラフトチューブ残存
4-1	宮之浦 宮東	前掛 け	9 m／ 1.5m	木	骨粉・精米	昭和初期～27年頃	西 村 仲 袈 婆	
4-2	〃	〃	〃	〃	線 香	昭和27年頃～40年頃	西 村 政 夫	
5	本名 二本松	在来型	約 7 m／	木	精 米	～昭和30年頃	田 鎖 袈之助	
6	本名 本吉田	在来型		木	精米・製粉 製材・骨粉	不 明	上 霧 仲次郎	

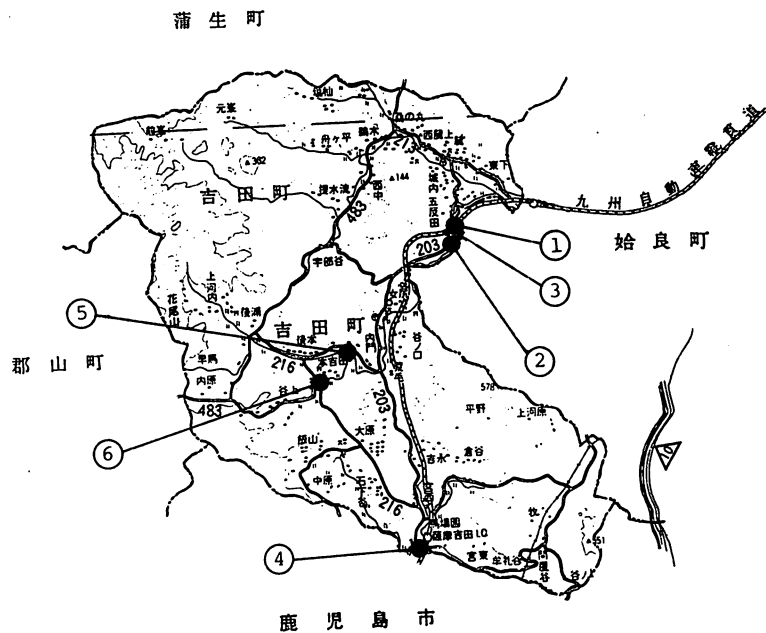


図2 吉田町の水車利用分布

表3 日置郡郡山町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1-1	郡山 上常盤	上 掛 け	5.5m／95cm	鉄	精米・骨粉	大正14年～(1-2)	常盤産業組合	
1-2	〃	〃	〃	〃	精 米	(1-1)～昭和58年頃	下 茂 哲	現存・休止・一部破損
2	郡山 大中	前 掛 け		鉄	精 米	大正14年頃～昭和20年頃	常盤産業組合	水車跡・水路一部残存
3-1	郡山 森滝	前 掛 け	約6m／	木	精 米	大正初期～昭和7年	不 明	タービンに切替
3-2	〃	横軸タービン		鉄	精米(製材)	昭和7年～昭和20年頃	〃	福山氏引継
3-3	〃	〃		〃	精 米	昭和20年頃～47年頃	福 山 学	
4	郡山 坪久田	上 掛 け		木	精 米	不 明	岩 下 商 店	
5	有屋田有屋田下	前 掛 け		木	精 米 (?)	～明治時代に消失	不 明	
6	有屋田有屋田下	前 掛 け		木	骨 粉	～戦後まで	永 徳 一 郎	水路現存 水量豊富
7	有屋田有屋田下	縦軸タービン		鉄	骨 粉	～戦後まで	永 徳 一 郎	6の下に設置
8	厚地 花尾	前 掛 け		木	精 米 (?)	不 明	不 明	
9	厚地 花尾	縦軸タービン		鉄	精 米	不 明	不 明	
10	川田 川田上	前 掛 け		木	精 米	不 明	不 明	
11	川田- 川田中	上 掛 け	約7.2m／	鉄	骨 粉	不 明	坂之上 一 郎	現存・放置・水路崩壊
12	川田 川田中	上掛け (?)		木(?)	骨 粉	不 明	坂之上 一 郎	11の傍らにあった

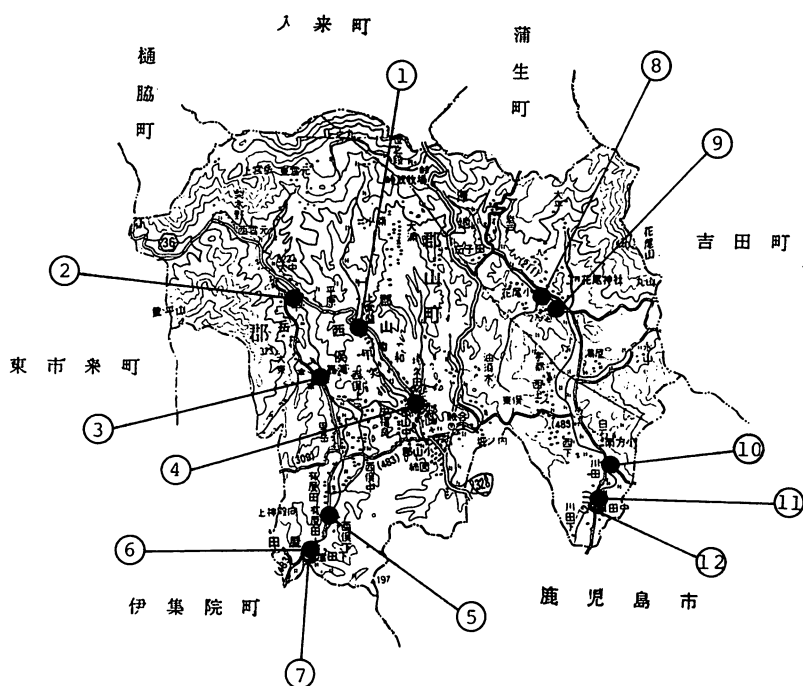


図3 郡山町の水車利用分布

表4 日置郡東市来町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	田代 田代西	上 掛 け		木	骨 粉	不 明	東 某	滝の下右岸 廃止後、2を 設置
2	田代 田代西	上 掛 け		木	精 米	～昭和6年頃	東 某	滝下流左岸に設置
3	皆田 芝居殿	前 掛 け	約3m/	木	精米・製粉	不 明	鍛冶屋 一兵衛	
4	湯田	上 掛 け		木	骨 粉	～昭和25年頃	浜 崎 栄 蔵	大滝の骨粉 滝の脇に取水 口現存
5	湯田	前 掛 け		木	骨 粉	不 明	石 神 某	大滝の少し上流右岸
6-1	長里下養母下	上 掛 け	約4m/70cm	木	との粉製粉	～昭和16年頃(?)	田 丸 ミ ヤ	戦時中精米に切替
6-2	〃	〃	〃	木	精 米	昭和16年頃(?)～20年頃	〃	
6-3	〃	〃	〃	木	製 材	昭和21年頃～23年頃	〃	
7	長里 古市	上 掛 け	約4m/70cm	木	精 米	～昭和20年頃	中 村 司	
8	長里城之町下	上 掛 け		木	精 米	不 明	田 丸 キクエ	
9	伊作田	上 掛 け	4.8m/	木	骨 粉	明治17年～昭和?年	鹿児島化成	上の水車 (水輪破損)
10	伊作田	上 掛 け	4.2m/	木	骨 粉	明治17年～昭和51年	鹿児島化成	現存・放置 [中の水車 杵部なし]
11	伊作田	上 掛 け		木	骨 粉	明治17年～昭和6年頃	鹿児島化成	下の水車
12	伊作田	上 掛 け	約6m/	鉄	線香製粉	不 明	浜 崎 信 行	現存・放置
13	美山下南(?)	在来型(?)		木(?)	不 明	不 明	愛 甲 某	

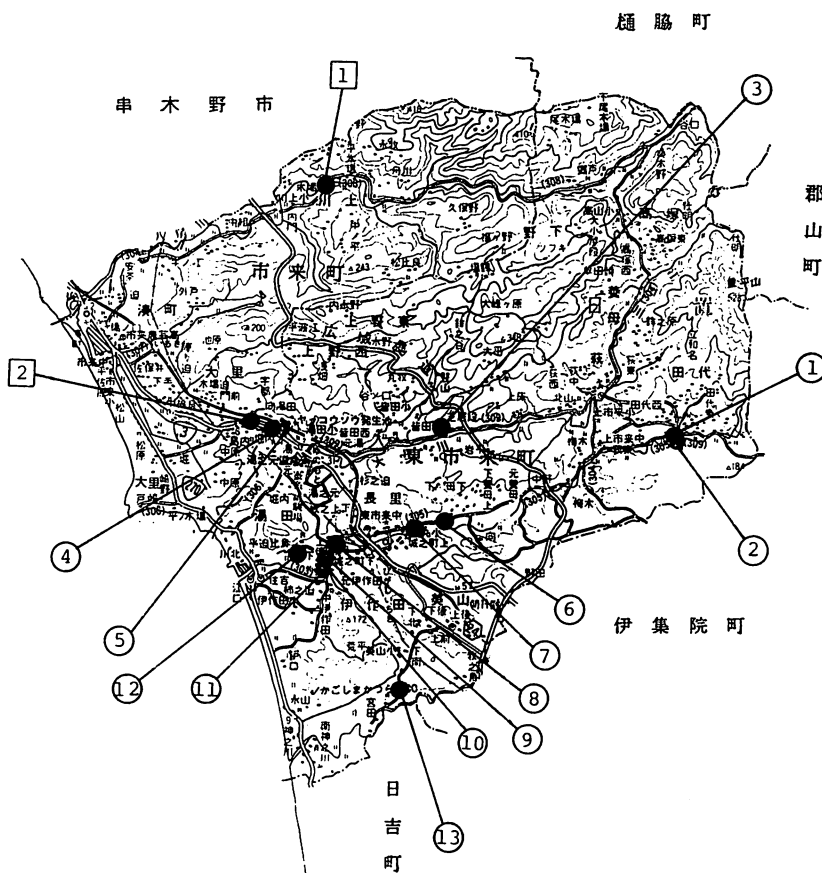


図4 東市来町・市来町の水車利用分布

表5 日置郡市来町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	川上 木場	前 掛 け	約 3.6m/90cm	木	精米・製粉・押麦	昭和26年～40年	木 場 庄 一	水路現存
2	大黒 島内	流し掛け	約 3.6m/90cm	木	焼酎製造用動力	明治27年頃～昭和40年頃	松崎吉次郎→茂	

表6 日置郡伊集院町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	郡 神之川	在来型 (?)		木(?)	精 米	～昭和30年頃	東 高 男	当初は骨粉・製粉も
2	大田	前 掛 け	約4 m/	木	精 米	～昭和42年頃	吉 村 某	
3-1	大田	上 掛 け	約3.6 m/	木	精米・骨粉	明治時代 ～昭和16年頃 (?)	坂 田 盛 蔵	戦時中貸出
3-2	〃	〃	〃	〃	線香製粉	昭和16年頃 (?) ～20年	〃	貸出し
3-3	〃	〃	〃	〃	精 米	昭和21年～22年	〃	電力に切替
4	大田	在来型 (?)		木(?)	搾 油 (?)	不 明	鹿 児 島 油 脂	
5	麦生田	前 掛 け		木	精米・製粉・搾油	不 明	中 立 輪 勉	
6	麦生田	縦軸タービン		鉄	精米・製粉・搾油	不 明	中 立 輪 勉	現存・放置 (土砂堆積)
7	麦生田	在来型 (?)		木(?)	精 米	不 明	宮 下 俊 一	
8-1	野田	上 掛 け	約3 m/	木	骨 粉	～昭和34年頃	中 間 茂	ベルトに切替え
8-2	〃	ベ ル ト ン		鉄	精 米	昭和35年～50年	〃	現存・放置 [電力に切替]
9	下土橋	在来型 (?)		木(?)	精 米	～昭和20年頃	柿 内 喜一郎	
10	中川	在 来 型		木	精米・骨粉	～戦前	永 徳 一 郎	澱粉工場設置に伴い、取り壊し
11	寺脇	上 掛 け		木	精 米 (?)	～昭和33年頃	不 明	
12	猪鹿倉	在来型 (?)		木(?)	製 糸	明治31年～40年	鹿児島授産学校 第二部分教場	水車1台「鹿県統計書」

表7 日置郡松元町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	上谷口 本坊	前 掛 け	約6 m/	木	精米・製粉・押麦	大正7年頃～昭和17年	草 田 善之助	廃業
2	春山 森園	上 掛 け	約8 m/	木	精米・骨粉	大正2年～昭和10年頃	永 徳 加太郎	水路・水車設置場所現存
3	春山 森園	横軸タービン	25馬力	鉄	精米・製材	終戦後～昭和43年頃	肥 後 静 男	2より10m程下に設置
4	直木 薦巣	在来型 (?)		木(?)	樟 脳	～昭和25年頃	内 平助→巖	

表8 日置郡日吉町における水車利用実績

番 号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材 質	用 途	使 用 期 間	所 有 者	備 考
1	日置 草原	上 掛 け	約4.5 m/60cm	木	精 米	昭和4年頃～15年頃	成 田 某	大水のため、放棄

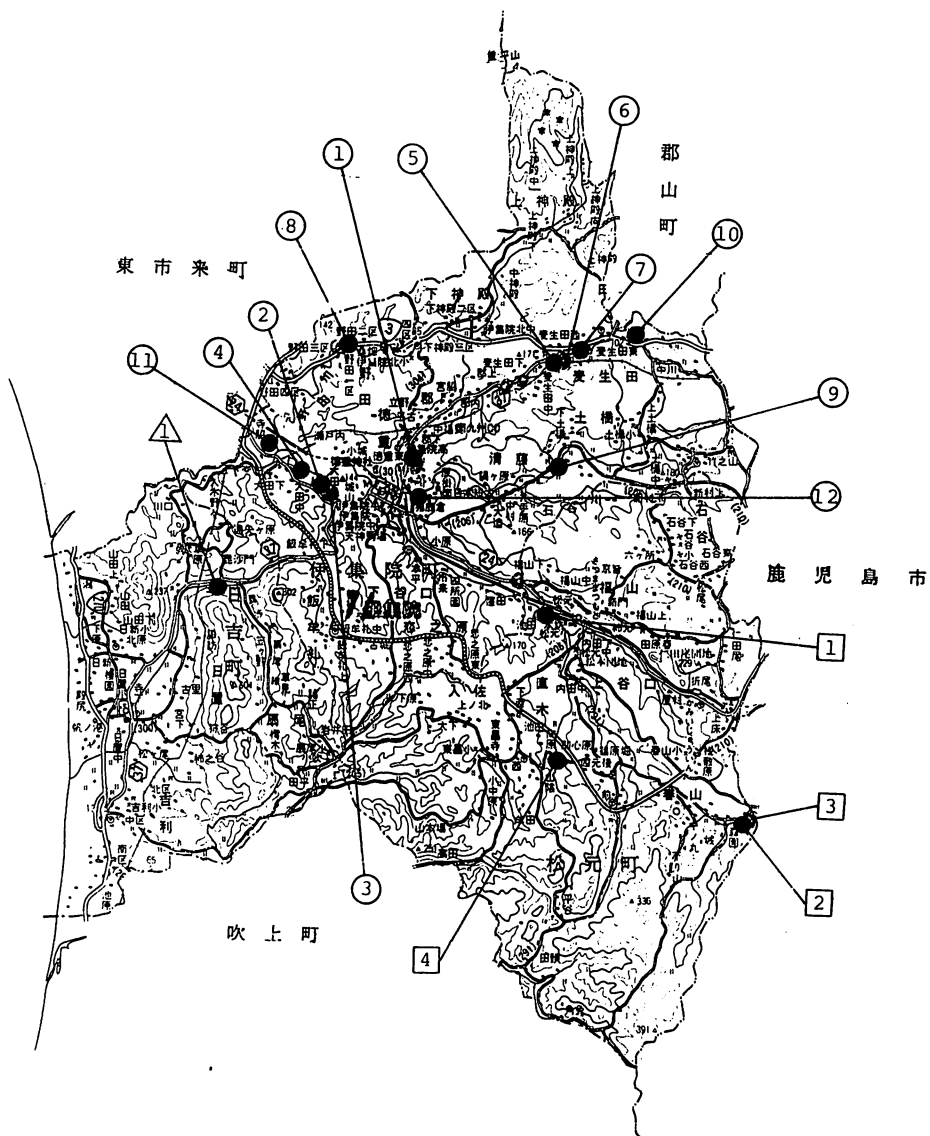


図5 伊集院町・松元町・日吉町の水車利用分布

表9 日置郡吹上町における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1-1	永吉 七呂	在来型		木	骨粉	～昭和21年頃	不明	タービンに切替
1-2	〃	横軸タービン		鉄	製材・精米	昭和21年頃～26年頃	〃	用途変更
1-3	〃	〃		〃	精米	昭和26年頃～43年頃	〃	岩井田氏に引継
1-4	〃	〃		〃	〃	昭和43年頃～56年頃	岩井田 静	現存・休止
2-1	永吉 田代野	在来型		木	不明	昭和初期～12年頃	坊野 岩吉	
2-2	〃	〃		〃	製材	昭和12年頃～15年頃	不明	タービンに切替
2-3	〃	縦軸タービン		鉄	〃	昭和16年頃～26年頃	福田 義教	
2-4	〃	〃		〃	精米・製粉・押麦	昭和26年頃～35年	〃	現存・放置 (土砂堆積) [電力に切替]
3	与倉	前掛け		木	精米・製粉・押麦	昭和15年～昭和52年	大坪 国男	電力に切替
4	湯之浦南湯之元	縦軸在来型	88cm／	木	水車からくり	昭和60年より復活	南湯之元温泉組合	6台稼働 [7月の温泉祭]
5	和田 平鹿倉	在来型(?)		木	精米	不明	不明	
6	和田 上和田	在来型		木	精米	不明	不明	
7	和田 春尾	横軸タービン		鉄	製材	～昭和34年頃	内野 幸麿	戦前は大井 某氏
8	和田 春尾	タービン(?)	12HP	鉄(?)	搗 鉦	明治27年	助代銀山春尾粉砕所	明治27年 「鹿県統計書」
9	和田	在来型(?)	4HP	木(?)	搗 鉦	明治27年～29年	助代銀山製錬所	「鹿県統計書」
10	永吉	在来型(?)		木(?)	製 糸	明治30年～31年	私立鹿児島授産学校 永吉文教場	水車1台 「鹿県統計書」
11	永吉	在来型(?)		木(?)	製 糸	明治31年～39年	吉留製絲場	「鹿県統計書」

表10 日置郡金峰町における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径／幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1	大野 厚佐野	上掛け	3m／45cm	木	発電	昭和34年～36年	集落共有	500W程度の発電力 13戸へ供給
2-1	中津野浦之名	在来型		木	精米	昭和23年頃～(2-2)	堀切 勇吉	上野氏に引継
2-2	〃	縦軸タービン		鉄	精米・製粉・押麦	(2-1)～43年頃	上野 よしたか	電力に切替
3-1	白川 白川中	上掛け	約4m／	木	搗 鉦	昭和初期～(3-2)	不明	樋渡鉦山 茶円氏引継
3-2	〃	〃	〃	〃	精米・製材	(3-1)～昭和19年	茶 円 常 吉	4へ移設
4-1	白川 白川西	〃		〃	製 材	昭和19年～(4-2)	〃	タービンに切替
4-2	〃	横軸タービン		鉄	〃	(4-1)～昭和30年頃	〃	
5	白川 河前	在来型(?)		木(?)	搗 鉦	明治23年～24年	河 前 銀 山	24年に水車「鹿県統計書」

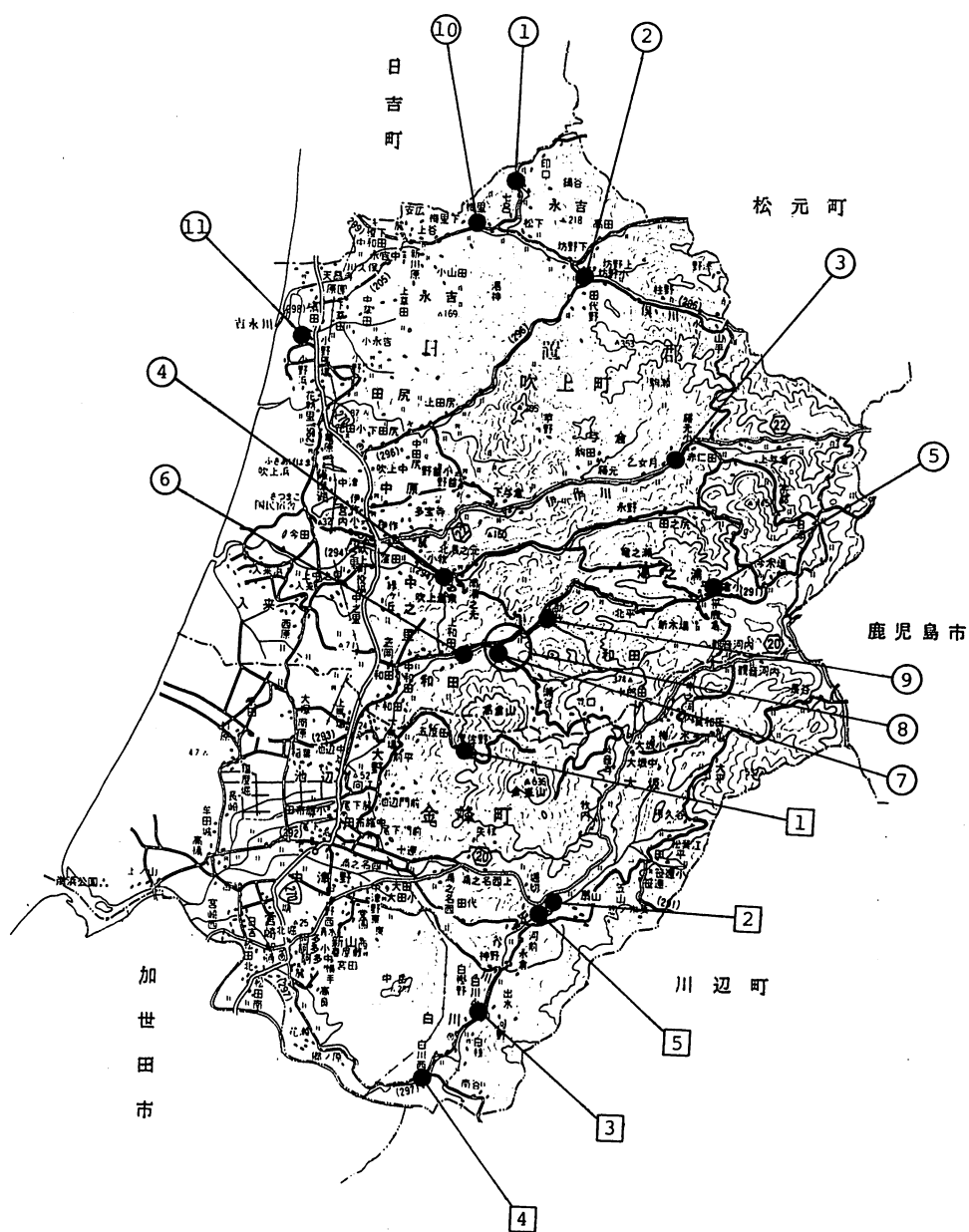


図6 吹上町・金峰町の水車利用分布

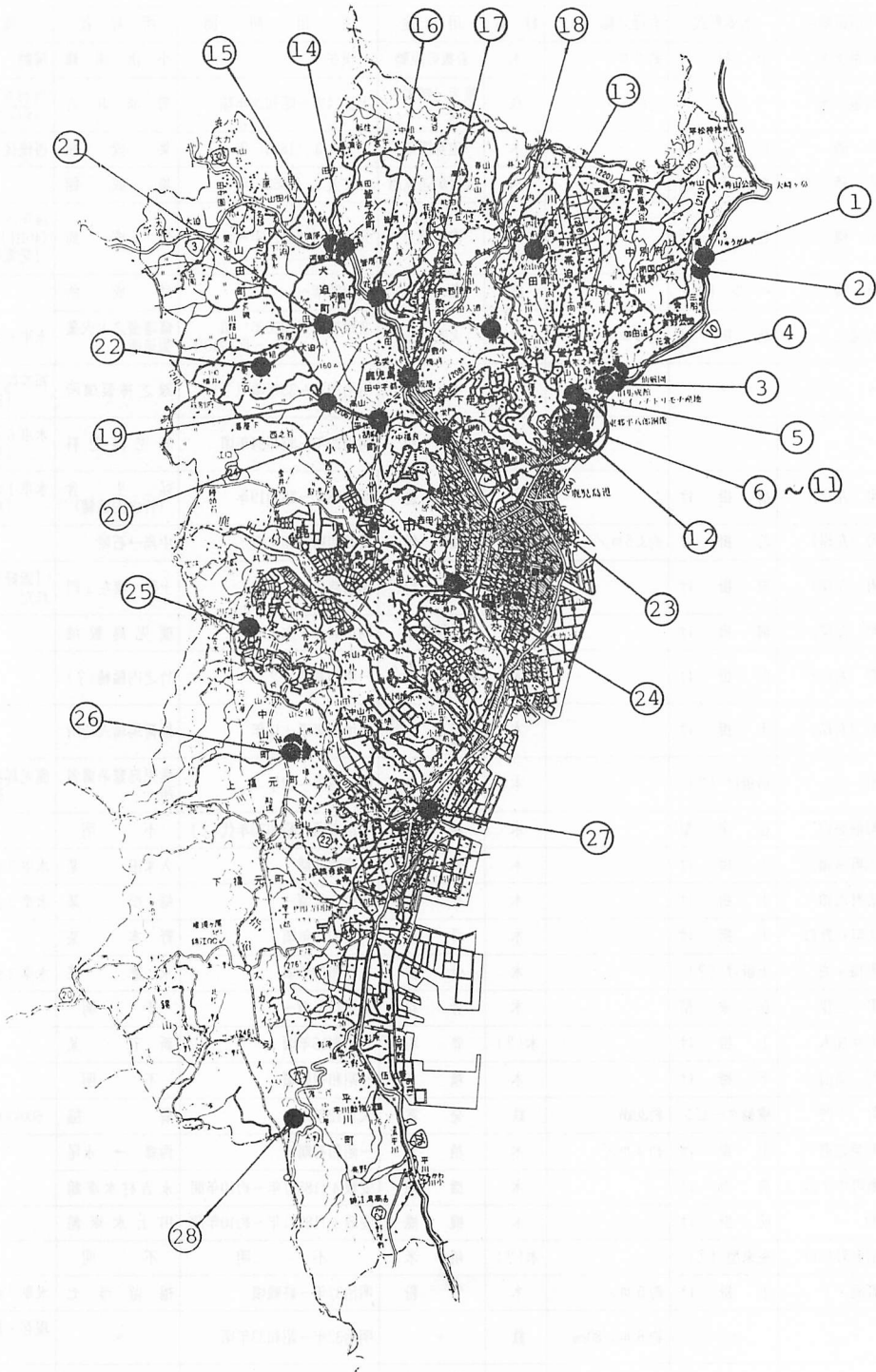


図7 鹿児島市の水車利用分布

表11 鹿児島市における水車利用実績

番号	水車設置場所	水車形式	直径/幅 (m)	材質	用途	使用期間	所有者	備考
1	吉野町竜ヶ水	上掛け	約2m/	木	看板の駆動	～現在	小浜洋輝	稼動
2	吉野町竜ヶ水	ベルトン	約80cm/	鉄	精米・精麦・押麦	大正14年～昭和26年頃	菊浦直吉	当初木製上掛け(約3.6m/) 使用
3a	吉野町 磯	在来型		木	砲身鑽開	～文久3 (1863) 年	集成館	再建後は製材用
3b	吉野町 磯	在来型		木	反射炉送風用	～文久3 (1863) 年	集成館	
3c	吉野町 磯	在来型		木	機械動力	元治元 (1864) 年～	集成館	後年ベルトン水車(40HP)を設置 [発電等]
4	吉野町 磯	ベルトン		鉄	発電	明治25年～	就成所	
5	稲荷町滝之上	前掛け	約4m/	木	火薬製造	文政初期 (1820年) 頃 ～明治10年	薩藩瀧之上火薬製造所	水車6台
5-1	〃	〃	〃	〃	搗 鉦	明治29年～33年頃 (?)	瀧之神製煉所	祁答院重義水車2台 [鹿県統計書]
5-2	〃	〃	〃	〃	骨 粉	明治29年～昭和24年頃	鹿児島肥料	水車6台 [明治36年 「鹿県統計書」]
6	稲荷町 (左岸)	前掛け		木	製 麵	明治38年～昭和19年	弘生舎 (竹之内輪軸)	水車1台 「鹿県統計書」
7	稲荷町 (左岸)	前掛け	約3.5m/1.5m	木	製 麵	昭和初期～28年頃	中島→石原	
8	稲荷町 (左岸)	前掛け		木	骨 粉	明治時代～大正末	上野喜左エ門	「岡野水車」と呼ばれた
9	稲荷町 (左岸)	前掛け		木	菜種搾り	明治40年～大正末	鹿児島製油	
10	稲荷町 (右岸)	前掛け		木	精米・精麦・製粉	～昭和初期 (?)	竹之内輪軸 (?)	
11	稲荷町 (右岸)	上掛け		木	薬きょう・信管製造	明治初年頃～10年	稲荷馬場火巧所	
12	清水町	前掛け (?)		木	製 糸	明治28年～32年	鹿児島蠶糸講習所	鹿児島授産学校 「鹿県統計書」
13	下田町前原迫	在来型		木	精 米	明治末頃～昭和30年代 (?)	不 明	
14	皆与志町河頭	上掛け		木	骨 粉	～昭和初期	久米田 某	水車3台
15	皆与志町河頭	上掛け		木	骨 粉	明治9年頃～	稲松 某	水車2台
16	皆与志町花野口	上掛け		木	骨 粉	～昭和15年頃	野本 某	
17	伊敷町梅ヶ淵	上掛け (?)		木	骨 粉	～昭和15年頃	永徳 某	水車2台
18	伊敷町 七窪	在来型		木	骨 粉	大正12年頃～	不 明	
19	小野町幸加木	上掛け		木 (?)	骨 粉	～昭和15年頃	新宅 某	
20	小野町 高山	下掛け		木	精 米	～昭和初期頃	不 明	
21	犬迫町 下門	横軸タービン	約30kW	鉄	発電	大正12年末～	農 協	600戸程度に給電
22	犬迫町栗之迫	上掛け	約4m/	木	精 米	～昭和初期	西郷 → 永尾	
23	下伊敷町中ノ迫	前掛け		木	機 織	安政4 (1857) 年～約10年間	永吉村水車館	
24	田上町	前掛け		木	機 織	安政4 (1857) 年～約10年間	田上水車館	
25	五ヶ別府町川口	在来型 (?)		木 (?)	精 米	不 明	不 明	
26a	中山町滝ノ下	上掛け	約5m/	木	骨 粉	明治32年～終戦頃	福留彦七	水車2台
26b	〃	〃	約6m/80cm	鉄	〃	明治32年～昭和33年頃	〃	現存・放置 (一部破損)
26c	〃	〃		木	製 材	～戦後	〃	
27	上福元町桜川 (?)	前掛け		木	骨 粉	大正年間 (?)	福留彦左衛門	
28	谷山 錫山	在来型 (?)		木 (?)	搗 鉦	明治39年～大正4年	錫山支部	水車1台 (5HP) 「鹿県統計書」

3. あとがき

鹿児島県内を分割した7地域のうち、薩摩半島北部地域（2市9町）の水車利用実績について水車用途別に集計してみると、串木野市の搗鉦水車が仮に202ヶ所として、精米・製粉・精麦等の水車が37ヶ所（現存4台）、骨粉用24ヶ所（現存3台）、精米と製材、搾油、線香等の兼用水車が6ヶ所（現存1台）、製材5ヶ所、製糸用水車が4ヶ所、精米・骨粉用2ヶ所、搾油用2ヶ所、発電用3ヶ所、線香用2ヶ所（現存1台）、製麺用2ヶ所、水車からくり6ヶ所（稼動6台）、その他16ヶ所（稼動1台）等、総数315ヶ所（現存16台）あったことが判明した。

この記録はもちろん完全なものではなく、実際には

調査漏れのものも少なくないと思われる。今後も、各市町村の古老や郷土史家の協力を願って、さらに充実したものにとめていきたいと思っている。

引用文献

- 1) 松村博久・門久義, 鹿児島県の水車利用に関する研究 第1報 北薩地域について, 鹿児島大学工学部研究報告, No.32, 平成2 (1990) 年, pp.21～36
- 2) 竹中武夫, 串木野市手掘り史談会 研究資料 鑛山と水車, 昭和55 (1980) 年, その他の資料
- 3) 五代龍作, 芹ヶ野金山鑛業誌 全, 明治44 (1911) 年, p.15
- 4) 鹿児島県, 鹿児島県統計書 明治26年～大正13年